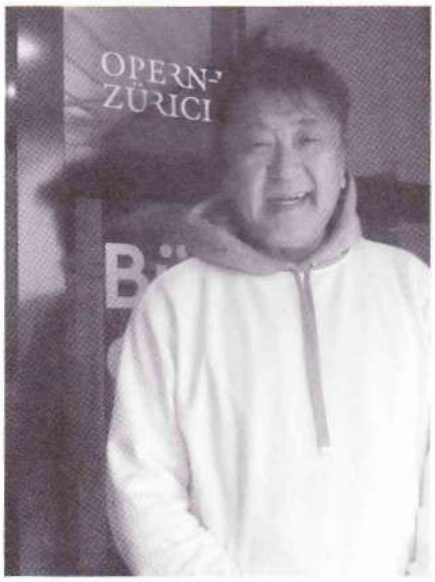
海外レポート

worldwide classical music report

今月の注目公演

佐渡裕、チューリヒ歌劇場にデビュー

拍手に応える佐渡裕
©中 東生



コンサートのときのオフショット
©中 東生

4月23日、佐渡裕がチューリヒ歌劇場に初登場した。歌劇場の外ではチューリヒ・マラソンが行われている爽やかな日曜日の朝、暗い客席に入るのに抵抗があったが、バーンスタイン「管弦楽のためのディヴェルティメント」で、一気に外よりも強い光に包まれた。「第1曲 ラッパの合図とファンファーレ〈セネットとタケット〉」でウォーミング・アップ、チューリヒの真面目な聴衆をやんちゃに揺さぶったのもつかの間、「第2曲 ワルツ」では鳥肌ものの美しさ。そして「第3曲 マズルカ」では、オーボエ等にあえて異質な固いフレージングを要求し、不穏を感じさせた。これは、現在の世界情勢への皮肉を込めて犠牲者へ寄り添う哀歌なのか。そんな深読みも「第4曲 サンバ」ですぐ中断させられ、一気にジェットコースターに乗せられたように、展開する景色を楽しむ。おかしな場面では素直に笑いが起き、楽しみながら一体感を増した劇場全体が「第7曲 ブルース」で完全にアメリカへ飛んだ。指揮者レナード・バーンスタインは死んでも作曲家として生き続け、「弟子」がレニーを指揮台の上に生き返らせる、そんな音楽の輪廻転生を目の当たりにした貴重な体験だった。

続くコープランド「クラリネット協奏曲」は、チューリヒ歌劇場のオーケストラで何十年も聴衆に感涙させ続けているロバート・ビックアップのソロだが、そのクラリネットをヴァイオリンの音で上から被せて、上げるような佐渡の指示が光った。ともすれば金属的に炸裂する高音も、オーケストラが支えてハーモニーを与える。そうしてカデンツァに到達すると、自由に全力を出しきれるのだ。アンコールはジャケットを脱いで、赤いベレー帽を被った首席コントラバス走者とベニー・グッドマンさながらの演奏で盛り上げたが、聴衆は佐渡の功績を忘れることなく、再び舞台に呼び出した。

休憩後のシベリウス「交響曲第2番」は音で描く壮大な絵画のように練り上げ、いくら盛り上がっても限界に達することなく、どんどん膨らませながら最後の音まで到達した棒さばきが見事だった。 **(中 東生)**